



# 樹蔭静けさ

北海道帯広三条高等学校  
〒080-2473  
北海道帯広市西23条南2丁目12番地  
TEL : 0155 (37) 5501  
発行日 令和4年8月31日

## 充実の夏 ～ 全国を舞台に三条生が大活躍



### ◆放送局NHK杯テレビドキュメント部門優勝

第69回NHK杯全国高校放送コンテストのテレビドキュメント部門で本校放送局が優勝しました。受賞作「Say」は全身の筋肉が徐々に動かなくなる筋萎縮性側索硬化症(ALS)の患者さんが、症状の進行で話せなくなる前に自分の声を音声ソフトに残そうとする懸命な姿と、自宅で介護する高校生の息子さんやサポートする方々の思いを8分の映像にまとめた作品です。8月1日付けの十勝毎日新聞「編集余録」欄で「これって、本来ウチがやるべきことだね」とプロに言わしめた素晴らしい作品です。現在、NHK札幌放送局で無料配信していますので、是非ご覧いただきたいです。それぞれの思いが伝わる感涙必至の作品です。

(<https://www.nhk.jp/p/ts/L35G9KKNJ4/movie/>)



### 三條生発案のイベント開催

6日、野外イベント「麦音deフェス」が開催されました。これは昨年度、現代社会の授業「地域貢献プロジェクト」で小谷愛実さん・倉口遙那さん(いずれも3年)が、麦音とコラボしたイベントを提案。それを本校地域コーディネーターの長岡行子さんがますやパンの大川原典宏課長代理に働きかけて実現したものです。当日は多くの三条生がボランティアスタッフとして参加してくれました。小谷さんと倉口さんは「自分たちの思いが多くの人とつながってこのような形になり嬉しく思います」と述べ、ボランティアスタッフの中心として精力的に動いていました。生徒の発案が地域と協働して実現できた素晴らしい場面でした。ご協力いただいた皆さんありがとうございました。

また、朗読部門では2年小川創さんが5位入賞を果たしました。これも全国4958人中の5位。朗読部門の決勝進出は本校及び十勝勢で初の快挙です。この朗読もNHKが朗読収録CDとして発行するそうです。その際はぜひ聞いていただきたいと思います。

### ◆全国総文祭・書道、特別賞受賞

東京で行われた全国総文祭・書道部門で3年伊原悠花さんが菅公賞・特別賞を受賞しました。作品タイトルは「冬の毛嵐」。「冬の毛嵐 雲龍の如く儂く揺れる」と書かれています。これは冬の十勝川に発生する「毛嵐」を「雲龍」と呼ぶことから、川面に横たわる龍のような幻想的な光景を詩作したものです。受賞に伊原さんは「ずっと入賞を目指して創作にあたってきましたが、まさか実際に入賞するとは思っていませんでした。発表を聞いた時は信じられない気持ちでした。指導してくれた先生方のお陰です」と話していました。



### ◆女子ハンドボール部、愛媛高校総体出場

女子ハンドボール部は、愛媛県で開催されたインターハイに出場し、1回戦山形・惺山高校に15-20で惜敗しました。前半は堅い守りで8-5とリードして終了。後半は相手GKの好守にはばまれ、徐々に相手ペースになってしまい、残念ながら2017年以降の1勝は果たせませんでした。それでも全国で得た経験は確実に後輩たちに受け継がれていくものと思います。

### 「第95回記念平原社展」に辻さん入選

帯広十勝の絵画をリードする平原社展で、本校3年の辻かなでさんの作品が佳作賞を受賞しました。辻さんは美術部に所属していますが、今回、高文連の規格を超える50号の絵画に挑戦し、見事入選を果たしました。顧問の村上教諭は、「平原社展はレベルが高く、高校生での入賞はあまり例がありません。素晴らしいことです。」と話していました。

作品名は「Jam」。バイクで混雑し渋滞する中でこちらを見る男性。リアルな描写の中にさりげなく詰め込まれた雑多でちょっと不思議な世界。独特の世界観を見事に描ききっています。「高校生活の集大成として挑戦してみました。入選したのは嬉しかったですし、自信になりました。見てくれる人が面白いと思ってくれたら」と辻さん。現在、生徒ホールに展示しています。ぜひご覧ください。



## 第23回 生徒支援部長 森 育子 教諭

### 何に対しても一生懸命にやる姿勢が大事



#### ◆私の高校時代

私は小学生の時に好きな先生がいて、ぼんやりと先生になれたらいいなと思っていましたが、職業としてははっきりと教師になりたいと思ったのは高校生の時です。ミッション系の女子校に通っていましたが、先生方が親身になって指導してくれる学校でした。私はキリスト教徒ではなかったのですが、高校の授業に聖書の時間があつたり、クリスマスが近くなると毎朝お祈りをしたり、附属幼稚園の子どもたちと一緒に復活祭を祝ったりと、今思えばとてもいい経験でした。

英語教育に熱心な学校で、外国人の先生が居たり、交換留学制度や語学研修などがありました。私は数学と英語が苦手でしたが、先生方の指導や学校の雰囲気のお陰でだんだん英語が好きになりました。高1の時には市の留学派遣制度でアメリカ・テネシー州へ、高2の時は語学研修で同じくアメリカ・カリフォルニア州に行きました。私たちをオープンに受け入れてくれるホスピタリティーに驚きを覚えました。なぜこんなにしてくれるのだらうと思うほどで、そうする下地があることに感動しました。そこで学んだことは人とのコミュニケーションは英語の力そのものではなく、わかり合おうとする気持ちが大切だということでした。たとえ片言でも何とかしようと思えば何とかなるものです（笑）。

#### ◆選択肢は豊富だけど……都会の光と影

大学は北海道を離れて東京の大学に行きました。日本に限らず様々な国や地域から学生が集まる大学でしたから、本当によかったです。いつかは北海道に戻りたいと思っていましたが、大学卒業後は千葉の私立中高一貫校に勤めました。都会はなんと

いっても選択肢が多いことが利点です。やろうと思えばすぐ手が届く範囲に何でもあるのです。大学も国立・私立関係なく自分にあった大学を選択できます。そんな環境が素晴らしいと思いましたが、とにかく仕事は忙しいものでした。勤務していた学校は私立でしたから、週休2日制ではなく、月1回の休日の土曜日でも行事やら何やらでほとんど仕事の日々。土日なく働きづめの毎日でしたので、そろそろ北海道に戻ろうと思うようになりました。その時既にその学校での勤務が10年になろうとしていました。

#### ◆何に対しても一生懸命な姿勢をいつまでも

北海道に戻って静内農業、寿都と勤務し、三条に来て5年目になります。赴任と同時に1年の担任になりました。進学校の経験は初めてでしたので、日々教材研究に追われた3年間でした。3年次の年にコロナ禍で臨時休校となり、全ての大会が中止となつてしまい、生徒たちは本当にかわいそうだったなと今でも思っています。今年から生徒支援部長になりましたが、まだまだ手探りの状態で、自分に何ができるのかしっかり考えながら進めているところです。それにしても三条の生徒たちは本当に何に対しても一生懸命にやってくれます。その姿勢が大事です。今はわからないかもしれませんが、いつかそれが色々なところにつながってくることに気づくことと思います。

### インタビュー

## きらり

三条高校で輝いている生徒を紹介します。インタビュアーは校長です。

### NHK杯ビデオドキュメント部門全国優勝

### 3年1組 鈴木 沙有理 さん



全身の筋肉が徐々に動かなくなっていく難病ALS患者である佐藤仁美さんの声を残す取組を知ったのは昨年11月のこと。新聞記事を見て取材を申し込んだものの、内容が内容だけにためらいもあったのだそうです。でも仁美さんや息子の謙太郎さんが「何でも聞いて」と言ってくださり、何度もお宅をお邪魔していく中で信頼関係を築くことができたのだと振り返ってくれました。日々進行していく病の中で明るく前向きな仁美さんと謙太郎さんに励まされることが多かったと言います。取材中、病気の不条理さに鈴木さんがつい泣いてしまった時には、逆に「沙有理ちゃんが来てくれたら元気になる」と寄り添ってくれたこともあり、「私の娘のように」っていただくまでになったのだそうです。「半年を超える取材の末にできあがった作品は、十勝地区大会、全道大会で多くの皆さんから『感動した』という声をいただきました。講評や感想を踏まえて、初めて見る人に仁美さんたちの思いがきちんと伝わり、より多くの人の心に響く作品になるようにその都度修正しました。」

全国の会場でも作品を見た方が涙を流す姿が多く見られ、終了後すぐに大きな反響があつたそうです。

「この作品はALSという病気だけではなく、声を残そうとする取組とそれを支える人々、そしてヤングケアラーの問題と、三つの視点を扱った作品です。ありのままに伝えることの大切さを改めて気づかせてくれました。」鈴木さんは小さな頃からアナウンサーになるのが夢で、そのため放送局に入局したとか。でも、ここに至るまでには多くの失敗や辛いこともあつたのだそうで、「そういった経験があつたからこそ、人の気持ちを考えて行動できることが少しずつできるようになったのかな。今振り返ると、成長のために必要な時間だったのだと思います。」

全国優勝の知らせに、仁美さんは「今行かないと行けなくなるかもしれないから」と直接、本校放送室を訪れてくれました。その時、優勝カップにつけるペナントリボンに「ひとみ」のサインを書いていただいたそうです。鈴木さんは自分の将来について、アナウンサーにとらわれず「本当に伝えなくてはならない声を拾って伝えていく」役割を担っていきたいと思うようになったそうで、そんな鈴木さんに仁美さんは「自分の決めた道を進んで行ってね」とエールを送ってくれたのだそうです。